朝夷巡島記第七編之四

一通
1278
34

1278
34

村田

朝夷巡島記全傳第七編巻之四

東都　松亭金水編輯

以レ色　操ニ英雄　説レ道　清ニ庶民一

續輯第七

往昔志賀寺の上人ハ碩徳悟道の大智識ゆゑ。年来行ひ澄せる。京極の
御息所と。面祝てより心地惑ひ。多年の勤行一時ふ虚空くゐの玉簪帝の歌と詠
じて。色の奴とゆりる例ハどもく人の口碑ふ傳ふ。況や朝夷ハ性質疾肝金瘍物
ふ動ぜず。義と重ゝ命と輕じ。識量尤尋常ならず。酒色と汰てその心と搏ず
ぐゝ死漢士ゐれども。あの年ひまだ二十歳。血氣餘ゝて智慮と覆ふ。元来聖賢ふ
あゝざれバその惑ひうきと能とゞ。當下磐手ハ熟ハ祝るふ。芙蓉の眸丹花の脣。ゆつ
まゝ鬢の黒髪の顔へかゝ在さゐハ。朧の月ふ糸柳の風ふ紊ゝぐ。そ。えもいはる

艶色に宵に遥ふ人々うりの。近倍てもそるその面影うも捨がてゝ必ひて。醉[illegible]く
痴るゞ如く。髪鬟と乱れ。忽地心とり収ぬ。人木石ふ[illegible]ざれ。吾とて情の無
うゝんや。然まども不義ハせじと。強て心ふ折ひうゝや義回怒ぞるとも。是のうへ
諾ひゞうて。頓て往弘往ざゝ。自ら其処へ曳出さんと。心強くも嗜みもまゝ。怒りを
い容と改めて。義ふ勇ましふ性なりとも。平生ふ学ぶぬまゝ。その願でも大々うの可きぬ
なゝんと未ぬ前ゝ。思ひ量まどゝれゝとて。怒ぶふ雑き心の馭の。狂ふ隨意と浮
き未て。思ひのゝけと告されゞ。猶可きぞく奈何ふせん。強ていいそゞ然いあれ。女子の
分うて恥うきゝ。ゝ紋言出可きまゝでうて。さそその侭ふ止るんや。恢いあ時いこれ斯と。
覚悟ふける妾ゞ分のゝ。今更何と惜まんと。のひゝ探る匕首。懐よりして把出。
拔みもうんせゞられと吾。吐と突んとゝ。是さんそ朝夷斥ひと伸ゝ。まゞ緊と腕を。
押へて頓て顔うち祝やり。恢ぬと紋いい発るうとまゞ。覚悟究めゝ其方の赤心

争う仇ふるまべきや。斯るうゝい不義の汚名と被うとも何う厭いん。其方ゞ願ひ
果さゝ呉んと。听て暴ふ微笑給ふ。仇るけまゞ身と捨て。必ひ未まゝ赤心と汲とけ
るふ旋ゝさふ。始めの歌き引入て。夢うとのゝを必ゝ。忌嫌うまとても猶懲を已ゞ
勝ひとうちつけふ言の葉ふ多き女子うゝみとかゝず褊ゝかゝるよ。深き心の真ふて。
君と思ふの切るゝて。憐まとこのゝとうち覆ふ袖ふ笛南奇の馥郁と。軒の梅ゞ香
春風ふ。閨の戸漏て薫ふ弁一色の朝貞朝風ふ。ゆびくゞ如く綢繆かまゝば。
朝夷やとゝくひとう伸べ脇へかけて曳寄ゝ。磐ゝゞ顔とうち戍るこの時[illegible]
い情愿の快ふて旋ゝき面持ゝう頻ゝふ笑て媚と献ゞ。霎時わりて朝夷ゝ。
忽地眼と怒らゝて。汝深くも謀ゝよる。色と餌ゆとゝまと繰り。心乱れて
正ゞゞせゞ。丈と名うて罪ふ陷さん。その計畧い始ゆとう。孫ゆ察ゝれどうゞ
その容とゝんと思ひ。怒ゝ心と押沉めて。ゞゝゝるゝ操言と。永ゝ必ゝ嫁ゝ

沸かれり。斯いかとても然ることなるべきと。三寸不乱の舌とりて。陳ぜべけまで五い聽さだ。いふとりふふ世の譬諭。蓼喰虫の好てと。受りのるべく見いれ。常ふ列る うんのことみて。未聞不見の吾と汝今宵始めて見えてうべ。命とうけて形まぢふ。

恋ひ慕ふべき所謂ま。そのう人汝が面と觀るふ。媚と欲ぢてことと挑めど。心中ふ殺気盛含て。言葉の端ふ怒れ彰る。あくとりそいふ処の実情ま。

めとうく察しう。猶とまみそも陳ぜるや。若然らんゆい彼処ま。疾撮棒と食りて。骨も體も微塵ふるさん。宵ふ定めて侍女ぞふ。物語ふもぞつ〳〵。贅力のわど残り手ぐーやと。白眼つゆる面魂。勇士の相貌ぞりふ。爭ひがつ〳〵えーと。藝でまうふ凡者ま。星と弁まーその洞とうち返さんと心と実ゆ。必ひもとぬ。疑ふ。

罪も覚えまる死のめと。詈ぞうふ。爲情ぞと。既ふ原ひの恢ひび。掛替のる死今え。

捨んとーる赤心。眼前ふ滴ーて。駐まひーふ待〳〵ぞや。凡そ害心と抱くもの。人

より前ふその身と殺ーて。伯の益ふうり待〳〵。加旃和君と吾倚と。作ぞ〳〵

今日始めて。遭ふ〳〵ーるもの。固うり讐も恨ぞもう。そと奈何ぞまべ

色と餌ゆそ。陷いるべきゆう。ぞふ陋ーきこの身ぞれば。漁ふ忌のくども。今と捨

て慕ひめる。見と注めんうるさふ。假ふ色と死同巷とう。今まと綽の爰ふちべ。

あーまあとふ怒と祝せそ。逐ひゆ〳〵んとーまふあるべ。然いまぞふ嫌ひのふるる人といふ

る因果ふ。ちりひ浩ぞる身の果敢ぞ。勅情の言ふこそ。今とうりそい絆ぞれ。

たぞ一ちぢふ怨襟〳〵ゆと。昔の人のぞーい此処ぞ。千回百回のふとても。和君が心ふ應

ぜぞふ。死ぞんとぞ人一念の。何今さ〳〵ふ爰ずべき。爰放ーてよと朝夷ぞ捕へーま

首尾ぞるが如く。放えとすると更ふ放さぞ。嗟哮つうり毒悪ぞる。鴆い毛色の蕪

いーけまと毒あるとりて人愛せぞ。汝頗ぞる美貌ありそ。心ふ虫毒と抱くこと。炯ぞり

も甚ーく。維ぞい見と真言とせん。今ひと捻ぞふ殺ちべけまと。問とあれば今ぞ。

且く此処ふ窮屈せよとのひも果ゝ在合る紐と揪て縛りあげ。偖安ふ問へく。
まづ何者ふ憑まれて。吾を害さんとふるぞ。実と吐べ今ハ助け。猶頼抵も
告ずとる。此鉄棒と喫いせん。いろふ〳〵とのひるがゝ。鉄撮棒と淫こと。引提て眼
さきへ突つけ。まさも問と屢るり。磐ひとゝも生懸命。その牙の浮沉もとふあり。
ゆふふうて溺惑る。胸ゝ定め押沉めて。滝と散める涙とあさへ。筒の云葉を繰
返し。心強ーとのべ。ふ非道とのふも餘ゝあり。頻ふそもと怨むの。他の言葉
あるとる。朝夷頭と左右ふうち揮ア。そのてくれそゆゝも要る。偽ひそ日間さん
ちり。疾く実と吐ぎ。と髪へ逆立眼と睜ア。で一喝ふるうんで威勢。イ海雄ミ此
心ふも。今ハ知ゝ屯ゝ。朝夷めの聰明睿智。その肺肝とうん透されくいん
ぎとすミど許さうん。在の隨意ゝ。拵妾へ絨の揀梁。修羅立郎が一二
の者。鉄盾矢藤五が妹ゝり。兄が山寨を退くと。妾へとる阿武隈大夫ふ頼らとて。ゆり

ーが。其後磐城の刀称ふ思ゝ。端ゝも側室とゝり。栄曜ふ月日と送るうち。幽
ふきけバ兄矢藤五。和君が為ふ計ゝと。隠ともあゝぬ此処ゝの風ふ悪人ゝり。
兄い兄いゝぞ敵と討ん。ゝのゝ便とゝ然ゝふ這四陸へ和君が下ゝふゝ。
ゝていゝ〳〵ゝ紀便宜。ゝる心地いゝるゝ。甲冑ゝ女子のゝゝ。及ゝめとゝ顧
ゝ心ふ歎ゝて在けるが。主ゝる四郎時直めゝ。いゝゝる青赴ゝ具ふゝ〳〵ど。和君と恨
むゝ〳〵あゝ。箇様ふ嫌ゝ〳〵油断と計ゝ。で一突ふ刺殺せゝ。それ兄への孝も
ゝ。主君への忠節い。漢士ふ勝ゝる勲功ふて。その後ゝり〳〵寵愛厚ゝ。歓楽栄曜ふ
浴ゝべ。ゝく仕課せゝと阿武隈が。渝ゝて頓て匕首とゝ。遍與ふゝるゝべ。兄ゝそれ。
天ゝが心と憐ゝて。兄の敵と討ゝるゝん。孫ゝて。ゝく朝夷ゝ〳〵。ゝ双の勇士ゝり〳〵
いゝど。酒と勧めて心と乱ー。色の罠りて計ゝん。ふ千ふ一も仕損ずゝ。ゝふあゝとゝ
ふも。ゝひゝゝて筒のゝく。心ふゝゝ紀虚言ふて。鈎んとすゝど石ゝゝも。ゝゝき

磐手の竹計

朝夷奴

挑む

鍊もとうるく却て此方の心中と曉らまてあの次第ふ及ぶも必ず悪の報いを
雖と恨まんやうもの。昉め兄の矢藤五が山寨と立退とき今より心と改めて善ふ
友ると言ちゞ不良の心猶已まで將軍家とさへ爰詐りとゞ必その罪いよ〳〵重く
首と斬て曝さるゝも元とゝ自業自得のこ。美ぞ和君と敵と寵んとれ為道
ふ背けー所為と今ことゝのひ当体とのひ俱ふ和君のまふ拵る
とゝも遁れぬ因縁なるべ。いざ速ふ首落て憤ゝと晴しのへと自若とある
在さるい女子ふ似げるる亡魂と朝夷ゝ〳〵感嘆し人のねふ死んとゝ。その言と善
とりふ汝ど挙動健気なり。さるゆても愛城時直まゝ彼阿武隈大夫なるぶいうるる意
趣と含ゝて取ふも足ざる妾の。ひと假て害さんとゝ。その主意更ふ解まがゝん今仮
初ふ察するゝ家孫ふ似合ぬ驕奢の分野。非ぞるる方ゝ賄賂と貪ゝ。諂ふ
者と戸貫ゝ負ゝりゝの浄瑠の起さーるり。もるゝと正ちゝ撿断使の裁許あゝべ

忽地ふ罪あゝるまんと忍こゝかゝる巧とるゝあゝべ。已ゞるゞ非と覆ゝんゝ他の合ゝ断
んとする。悪むふ埃ゝる残忍无頼這奴ゞる逸ゝ鉄撮棒と喰ゝて骨も肉も醯ふゝさ
ちんばゝの芥情い散ゞがゝ〳〵と歯ぐゝとのせーゞ忽地ふ荒示とうち笑ひ嗚呼吾ゞゝ
鈍ゝりき。渠ゞいゝるる故ふゝりゝかゝ計ゝゝゝ夫と知ゝゝで推量ゝて徒ふ膳と悩ゝと
やゝる。まゞ渠ゞゞ為体ふ心と著て行ゝるふ若ゞ然ゝてもゝの疑ひゝを正ゝき証拠ゝる
ものゝるゝゝ囲ひふゝゝゝゝゝゝと侍とゝれゝ代衣戸ゝり。其処引あけて侯ふ侍俳徨ふ
東西もゝ。これ屈竟と駆ゝとゝ。その侭其処へゝ入て。頓て蒲團とうち被き込ん
ひまゝせゝ寐らまもせゝゝゝ東雲ふる程近ゝゝんと四下の動静と侯ふ。安ふ差
いまゝ白ゝと。夜ハ明方とゝりふゝり。偖も時直阿武隈大夫。湯島の三人ハ遥の一間ふ四
居ゝて今ふ磐ゝゝゝ音信わゝん。いゝふせーゝゝと額とあつゝ。堅唾と呑でまゝゝ。更ふ
便宜と為ゝるゝゝ。兎角する間ふ東雲の頃ゝゝるれど猶沙汰ゝ。三人ハ頼りふ

呆き果て。驚きふるく〳〵心ゐう。渠も恨こと報いんと。念凝うゐうゑれば。仕損ずるとあるべうも。然りとも女子の甲斐なきふ。彼とも利ど乞もまと。朝夷こゐう然りもく。へ。その透なくて黙止せ。あの二つの外ゐい出。今も安時ゐそ侍女と。彼処へ遣て動静と探せうん。然ゐり〳〵と点頭あひて。俟て半時斗ふ。夜い全く明けまべ。侍女婢女とゐ〳〵起し。奥院の賓客ゐ。目覚のゐ。嗽の水望このゐ。湯もまわらせよ。頻往ずやと寐惚ゐる。婢女ゐもと急ゐまべのごとそ。遥の回廊。足音ゐゐく駈ゐ。死て。裡のゆうと。俟ゐふゐや朝夷も床のうへふ起ゐ。ゐる景勢ゐまべ障子と開き其処へ入ゐ。賓客目覚のひゐ。嗽の水と進らせんとゐい朝夷点頭て。頻ゐ持て来ゐとゐふ。婢女ゐもいまと疝戻ゐ。如此ゐゐい時直ゐ。他ふ汝ゐ怪ゐと。ゐふゐとゐなきやと問ゐけゐまと。定ゐふ心着侍られど。怪ゐと思ふとゐゐ。朝夷大人いで一個。蒲團の上ふ坐ゐのひぬと。ゐて心中訝ゐく。思ふふ。盤ゐひい朝夷の其怪力の物語ふ。忍まと。微て彼処へ往き。子舎ふ潜て居ゐゐ。嗟ゐ甲斐ゐ。とゐゐ。と咳きゐゐ〳〵駆ひゐ子舎と。覗きゐゐまと。新もゐ。脱ちゐる衣どもの。その侭あまべ往ゐふ。疑ひあまと。然いあまと。彼処ふ居らゐ。を訝ゐきと。三人ゐゐ考へて。ふひ出ゐまゐとゐゐ。兎角ゐゐふゐや朝飼の。出来ゐゐゐ程ふ。然いて四郎時直ゐ。衣服と改め朝夷と。舎せ。方へ到ゐ。挨拶ゐて右衣尤ゐまどいゐふも怪ゐとおりふとゐ。爰ふ於ていゐ。益不審ゐれば何とゐ。護身影も思ひ。夫ゐ安否と。鬼やあゐん。角やあゐんと案ゐて。更ふ心も落着き。折〳〵朝飼の膳持出。朝夷始めゐ。居まべ。形のゆくふ。釈ゐ。早ふ食仕まふ。この時ふ阿武隈大夫ゐ。敷居の傍ふゐとつきて。昨日鯛と出ゐる甲乙。都て十人斗。名簿と捧てまゐり出。彼処ふ控へ居ゐ。如何ふ計らひゐんと。いべ朝夷点頭て。今ゐ直ふ彼場所へ到ゐて。ひとまゐ検断まべ。供の

准備とるすべ〜。僕等ふ傳えられとのひ捨て去わぐり。去未怒城氏まろう
ん。足下も俱ふ未ゑとのくべ時直前ふこち。頻て去関へち出る。者下おくふ
集今〜人等。こる一般ふ礼と做せば。朝夷逸〜今釈る。さて夫この訴状を。
懐ふして立出る。かくてまづ怒城の郡夷志見角谷の二郷の人民且その荘の
地頭ゑる。誉田池月みどりく徒と。悉く召集今て訴状の趣きとりて。その旨
趣と尋めるふ。尚ふ賊首修羅五郎。経住ぐためふ掠めらまて。所持の本ゑを
ぶぐりし処。鎌倉より討ち下る。竟ふ賊等ふ誅ふ伏して。國中ゑ事ふ飯〜
れば。元の如くふ領さんとて。隣郷ちめ〜牒じ合せ。且守護ゑる怒城どのへ
そのうと訟へて。互ふ傍示の杭とおて。後葉の徴ふるさんとする時。隣郷の
ものその界の。乱まろと。僥倖ふ。土地と掠め奪りんとん。是ふろて斯のごき。浄
倫ふ及びるり。原〜ふ理非明白ふ。先規の如く所務ゑるさば。尊くふ理と

何とも同じ訴状ゆそ。そのりふ所ゑ斉一けまば。朝夷篤と聴定め。汝達ぐりふ
訴甚以て猶まろ。そもく右幕下の巡時ふ。四海の擾乱と鎮めるひ。万民賜を
ぎろひ。總追補使の職と請て。一国ふ守護とおき。一郡ふ地頭と置て。その掠
奪と誡めるる。怒ふ當ふ逆境ふて。且廣大ゑるふろ。往古も既ふ國府の外ふ。
鎮守府と置まろ。則其例ふ倣ひて。五郡ふて一人の守護あり。それ等ふ已ぐりふまで
もなく。汝達の知る訴ゑ〜ん。怒ふ一且修羅五郎ぐ。暴悪ふろて侵さるとも。賊徒
伐ふちとぶの後ふ。猶先規ふ順ひて。是と領さんふ誰ゑまと。掠め奪ふの号あん。
ぎろと絆の紛まふ。他と掠めて己と倍ふ。賊ゑるも甚〜。畢竟とまの乱
雑と。紀さん為の守護地頭。その職ふありるぐ〜。治めぐれば推て知る。苞苴ゑんとの
故ゑるべ〜。ぎろぐ〜是ふれ。その献ぎるるの不良ふて。受ゑ者も不良ゑれ。俱ふ論

ざる所なり。されど汝達ハ人倫の大道を説ざせん。その大道といふるは道を沂習仁義禮智信なり。仁とハ恵ミ憐まむといふ。凡そ上ハ在りの、耕ざるして食ひ織ざるして着る。他人の辛苦と貪りて衣食をとるをハ不仁ハ似たり。民の為ハ害を除き。不良を禁ド善ハ孝き。老を養ひ孤獨を恤ミ凶歳飢饉いるとも。飢渇の難を免れまゝ。その産業を優ハ。且下の情を察して。嫌ハとゝ。めぐ。その程ハ楽ミて世を送ると雖做さむ。その苦辛且くも休むとき功あるとハ人ことゝを敬ひそび。衣食を献じて労ハ易る。然るハ当時上ハ在りの。莫大なる俸禄。その才の栄曜の料と思ひ。権威ハ任じて民を虐げ。珍膳ハ飽綾錦を。才ハ溺へども足るとせず。頻ハ貪るのみハ民を苦らまゝ。偽を構え巧みを競ひて。利を射ると。昔とるを。義ハ於て上下和せず。互ハその虚を候ふと。敵ハ在ざるを。さを良もされば仁恵と云て。上より下を衒ハ似

さう。さて義ハ則権なり法なり。故ハ罪人を刑罰するも。義を存すをのみ不仁とのそ。あべての人の上ハ為ける。道ハ遺るるのみそ。義ハ非ざるを。人ハ東西を異え物を受るも。義ハ反して是を做も。既ハ這回の論のでは。先規あるを各のおろ。ハおいて初ぐるとなり。然るを私欲を逞まうるて。人を掠めて吾利せんとす。是不義の才一なり。心を心ハ問ハ恥ハかぐ。その義ハ出るや不出やと知るハ是則智といふなり。元来郷黨隣里の交り。互ハ志を厚して。人ハ譲るを礼といふ。まさその心ハ真ありて。偽ハ無と信といふ。この五ッを守るを。誠の人といふべきなり。然るを汝達一ッをも。この界ハあるもをして。已を富さんことを計るかく。詭論ハ及ぶハ至りて。遂ハ五常を失なり。吾若年の才を以て。聖がきく五常と説ハ。汝達心ハ烏滸となりハん。然れども今いハ所ハ全く已が言語ハあるを。古への賢き人が。教へおるを。その迹なり。吾若輩を努侮らんを恨ミて。黙識なさん。

労せずして其の非を知らん。その非を知らば先規とて田を領ち畏を正さふ少し
も難きことなり。ちくせうと喩さとて。其処なる甲乙口と噤み沒吾こしが巻田
池月どもを進えて言にせ。いろふも大人が宜ふ所い人道の大本ゆえ。是ふ起こる
とあらば。今その理解をせふ及びて。心中忽地ふ氷解せり。つまり〳〵職ふ在ばが。
下民と喩さの智量なく。却て大人が言語をせて。治めて覺るもいと強うこ。
と頭と掻く後方なり。村長なりとき招き。汝達も検断使なり。朝夷大人が
諭言と逐一ふせつらん。言でものとるが。守護目代などの人いつなる筋ふう
尺貝入負て。ことと減し彼と増し。理と曲うふあるふ。猶下の浄ひのこ日こ
ふ募りて止時なり。果い闘諍の萌とも。ゐんとせと吾まが押へて。検断使と
まち請ふ他いのとと強ふ願ひし規模の今彰りとて。大人がどき理非明白の。
検断使と下されしふまづ汝達が幸ひふて。吾こも猶慶べしふ汝達我と

覚りて。その心詞ふ従がゆや。但しい他ふ所存ありや。隠まん頻こ言べ。いふ
奈何と問かくまば。村長共い躍りて出つまり〳〵田夫野人なりとも。少しい義理も
辨へとりぬ。なるふ近年住べき土地と。賊ふ押領せ〳〵まてう。一日も安堵のゆひいあ。
その賊既ふ滅びて。数代傳いる居屋敷田畠元の如くふあんとい思ひの外なる。
下知ふて。或ひい減ト或いまと良田と上らまその代ふ年〳〵水と旱こふ登少なる
瘠地と宛らる。ふ於て戸毎のものかそい衣食の料ふ足らぬ。先規のごくそれ
そまふ割附のいぐ莫大のい慈悲なりと一同ふ守護のい雖へ歎きて。その
願ひとば聴入る。剰さ上と蔑如ひ。烏滸のものとて咎めて甚ちきを牢
舎ふおうぶさまば甲斐なき農夫なりとも。とて束ねて自滅と俟んや同じ命と
捨うる。守護のい館へ押よせて生死と定めんとのふい理ありなが。斯ていの
吾こが。越度とるんと惶こて。今日まで駐めもきん。然ふ検断使のい下向在

アて。斯の如く宣ふ。天より佐けのふのみり。爭ふ違背まうすべき。嗟嬉ー是
ろい。年老ろ両親及び妻や子供と安らうふ。養ふよすの有雅さ。実ふ産土
神ふて在ままそで。と伏洋むりのさへ多ー。朝夷いその容と祝て。守護目代ぞろ
私ろうと。嘉するのろ色ふも出さまで。不肖ろうこと。言と。忽地諾ひ無異ふ復
さい吾ふ於ても歎び思ふとりひっ浅方と視ふて。碧城阿武隈ぞふうち
剖ひ出さ如く在下ぎ。諭ちふ依て渠ぞふ服ーの然まとも渠ぞろ所持ろ良
田と奪ひて水旱の憂へある田とそまふ換ろ。元来不良の族ふあるまと。守
護目代ろ足下ぞろ。指揮ふ因て所勢ぞろうえや已ぎ東西と思ふや。然
ると今まと改め易てうや先規ふ須するうとも奪ふまとる如思ふのいるべて
下愚の常情ふて或ひい已ぎ非と顧ぞ。遺恨と含む族ぞ。ぐまさ石来の
爭ひろべー。喻へていそで盗人ありて。他の東西と把獲るときい。えや已ぎ東西

と思へア。本人ままと取戻そそ。怒ろ恨こそ仇とろす。とその理斉ーのえば。
支ぞの族ふ物と把らーそまぐ其心と宥むべー。元来非道ろうめと宥むる法い
あーれども。で理と曲てを事と計ろ。時ふ取ての便術ろうべー。さそその族ふ些ふ
べ。米銭い足下ぞろ。積蓄ろる所とも。節ふ頒ち與えらまと。ろる時い足下
ぞろ。恵こふ懐きそのの末。永く泰平と致ぞべー。凡そ一国と治むるのい一郡の
民富とりそ。已ぎ身の富とろ。一郡一郷と治むるのも。その理ふ於て変らぐーん。
いうふその意と知らまーらと。必ひもよーめ。弋秀ぎ。捌きく尚ふ守護目代ぞ。苞
苴と受て私ちろ。その金銭と再本人へ返さろんとするふあ。阿武隈むーところも
つ。物といえんとろしと。磐城い怜悧漢士ゆそ。ちや朝夷ぎ心中と粗察するー。憨
ふ。拒まべ。ちより賄賂の筋見ゆまそ浸雖の。忍まあーと思ふゆそ。急ふ阿武隈ぎ
袖ひき止め。その身忽地進こ出て仰する処逆一ふ。兼ーあと回答けーこふ於て朝夷い。

朝ひる
ゆうべ
あけがた
朝夷磐城の撿断使
さて民小
仁義の道を説ける
供養塔

村長とて其所の御図帳と出させ。さて下司と呼集令て。その由をさ〜示し。
形の如くふそまく〜へ割渡さべきことを令下。駿城三十六郷の。詮論一時ふ果
しゝ。朝夷心中ふ欣びつゝ。かの時直答と先ふ立。旅館を仆てゞ帰りをける

續輯第八

再揮佞者拙謀
且勝奸智舌頭

于茲湯島沸太郎い時亟答と商議して。磐ひうゑと假て戈矛と。刺
んとい輙〜と忍ひ居るふ。計らんや。その翌の朝ふ至りて。朝夷い恙なく。却て
磐ふい何地往けん。家の内ふあゝぞといふて。心易うゝも。右ふ左ふ思ひ
苦せども。其処へ見つゝ出べき身なるもぞ。潛こて物と思ひけるふ。朝夷始め時直阿
武隈。その餘の人ゝ。こゝる出さるゝて。館のうちも寂やうなるふぞ。密ふ其処とこゝ出て。
かの朝夷と宿ちる。奥舎のもゝへ到りて。狸のゆうと候ゞふ。僕と忍ちく一面倒

ろう成りて居る動静ふ序悪しゝと立戻りて。然るふても。繁ひゞ在所。彼処
うゝそまと他へ往べきもういあゝぬ。苦なるいふもちて探りて見んと。忍くゞ僕答ゞ
在ゝきいゝ。いとゝ都合あゝろう。こふ駿城の庖厨のこと。賄なふ男の賃助ゝ。
日未ろうゝて心利ろう。まゞ渠ふ心ゐうて。辛と図らびいと安〜。腹裡ふ計波て。頼て
厚助と密ふ招き。耳ふ口傳せ。如此こふ。計らくよくいひまゞ。厚助忽地諾ひて。
倖ひ昨夜の残の穀。でそのまゝゆて種こあり。在下ふ紀ふ計らひてんと。丈ろう暴い
下男の。甲乙と促しゝて。美味珍膳も大かふ。懲ひうまゞびこの種こと。ろう齎して彼
方へゆゝ。朝夷ゞ出ゆきう。迹と戍まる僕ゞもふうち。對ひて。莞尓やうふかく。門院の
留守居ゝ。さゞ退屈ふ在さゆう。えや日中ふも程ちろけまゞ。耶敬と調ト
るふ。一盞と傾けゝ。僕平生ふい庖厨のこの。閑しきもふゝ。ふもも甘ゞ。おろふ
今日刀称も出ゝう。秀暮ゝでい帰りもあゞ。まゝ丈まゞい。避近の非番。ゝ

身ぶるゝ一献酌こそ。要時ふさとも中んとゝ去来甘さそ給べきぐいひて其処へ
押並ぶるべ。僕ぶるえ未ゐる品。殊ふれ敷の折ゐれべうち歓ぶて大方ゐるべ。
舌ちゐて傍へう添ひさべ食應ふ頂〻んと。頓て盞と把あげつ。むづ
順盃も初めのうちぞや三四分の酔心地ゆい。不覚ふ興と覚えつ。心任せふ飲
ゝふ。主客忽地十分の酔と殺ゝてゐゐぐの。戯言ゐぐといひ散ゝ。時移る
まで酌ゐそ。賀助い猶頻ゝふ勧め。ふされめぐい興ゐゝと。茶碗ゐどとりて
来ゝて。勧ひるまゝふ僕ども。嬉しきさふ。ありひて。量ゝもちまも飲むふゝて。
泥のてゝふ酔湯け。おのゝ肘と枕ゐて。前後もちゝぐうち伏ゐう。程ゝよ
けまと賀助い。沸太郎ふ如此ゐゐと告まべ湯島大ふ歓び。則ちあゝふ
来ゝて彼方此方と探ゝゐるふ。果ゝてゐる袋戸の裡ふ何やゝ物あるゐ。此
処ゐんゆゝと押開くふ。器ふひふ足と縛されて。口ふい布もて猿轡をけらきて

暗ゐる。湯島ふむやゝ曳出ゝ。椽の傍へ抱き来て。猿轡と外ゝ縛の。細紐
ゐど成鮮すて。在あふ酒と茶碗へ次て。まろ一口共ゐふ。盤ふい芝と飲干ても。
渾身亀まり胸まゞ痞ゝて。四下と祝ゐのゝ言ふふゐ。かゝて湯島と賀助い。
左右ふさゐて引起ゝふと牽て徐ゝ。まづ渠ゞ子舎へ伴ひ。湯漬飯ゐど喫
まるふ。漸くあて人心地の。着ゝやとゐゐるゐどふ。四面の障子と建きゐて。湯島い
声ゐち潜め。そその容と尋ゐるふ。愛ゝふい屡吐息吻き。在ゝゞまゝと箇様ゝこと。
物かゐゐて歎息ゝて。頭とゞふも擡げぬい。面目ゐさふてあゐべゝ。推量ゐて湯
島ゞ。ぬん身壮夫ゆてあゝんゆゝ。おゐるき恥ゝもいへべけとど。不来甲斐ゐるき女すの
身。仕損じて形のでき。辱めと受ゐるも。失策ゝいひゞう。猶まゞ計らふ術も有
らんゞゝ心と張めよゝと。人べ愚ふい頭と擡げ。妾女子の身とりて。勇士と敵と
衆ふれべ。仕損じてかゐる妻目ゝんゐるも。縁ての覚悟ゐまべ。そと聊もゐげゝふ

なるねと。彼人は慮ひの外なる。聡明ふて忽地ふ腹の裡とこん透され。問さる処失こと。胸ふあるてあるへ。陳するとも許されと思ふふるて在の次第。逸て明く地ふ言ちくべ。何等の故とも分ざけとど。後の穿鑿の種なれと。縛揚て彼処へ入る。猿轡さへ懸らるとれば。物いふともなるずして。たゞ頂死れと思ふても。夫ちく已がちなるもの。漁面令存生て。悔しきのこう今かりくバ。刀称ちの計策さへ。明せてのいと悔ち。只原心ちくと今ちて。妾と殺して渕川ふ。然なるく人ちまて。骸と埋この陰と隠さしのへ。さすとバ妾が洞と証拠ふ。刀称ちの害心あるといふとも。然るとと頼抵のふの証拠ちるると絶てなけまへ。朝夷も術なくんと。なが有てい懇ふ。道なる道のいり。去来と殺ちそ〳〵と。なと拋伏てちち欲くと。湯島佶と共終て。忽地ふ掌と拍て。なが得ハ矢藤五が妹と。雄こちき挙動感心せり。然まとも見いられ。その証と消ちのこあて。益とちる所なく。まとん分も兄の敵眼前ふあると見拾く。死ぬとて本意とするふや。勿論朝夷の惶しさふ因心ある刀称の密事とさへ。明せてい女なるくるも。比怯なる挙動なるき。然まとくも洩せらへ。駟も舌ふ及ざるといへ。今さくふ何とうせん。されば此処ふて死なんと思ふ今と存生ちのなる。大望も果しちるへふ。妖城の刀称ふも雖あくせも。全き計策とるさんとする。心のなきいと死しと。ゆて無ふへ湯島の顔ちち戍て夫れどの。計らひあべ可惜き。今といるで捨んとちべき。开いまといるる便術ふる。妾が分ふて成べく。教へるるは頼計らんと。膝ちりとすれば。沸太郎ふ故意と呵ことちち笑ひ。その便術種こあり。然まるべくるへ分が如く。心弱くて何とる為さん。是い苦肉の謀計とて。輙く行ふべきふあるも。教へるるとも詮なきことなり。死なば死れ今惜く。存生て証ふち。自ら災ひと招きるへと。暗ふ励まと言ふふと少て。眼ふ涙と流

ちて。妾倘ふ心の甲斐なくも。大事を洩せ一科あるべきこと如此ことなれど。今い弥覚悟と究めて。身い亡りのと心い決しぬ。願くはその為様と示し給へと切ふ請。その面魂女子なれども。思ひ詰る景勢あれば。湯島い点頭ていなく心の決しなば。教ふるふなど雑ふべき。昨夜い色々と誘ひれど。渠ふ〻くふたのとと食も。這回いそもと表裡して。尚様こふ計ふべ。者下必らも頼抵て。昨夜のことと言募ることも。偽ふりと言消ふて。あん身がいべきことの。言と立なば渠怒ってまもくあん身と罵る時ふ。時直阿武隈ふ如此こふこば。渠ど威勢忽地ふ摧けるふ然もなくふ。我ふと張て狂ふふり。若狂ぐその座と去らせば。斫て両段とるさんの。渠何ぐりの術ありとも。既ふ此方い多勢ふり。殊ふい酒と強飲して。計らば何ぞ仕損ぐべき。心ひとつや恐いあまとく魂と居るふあるべく。克あること示せば。終ふい具ふ〻畢て。夫ふるのこいと易ふり。刀称ふふりくそのふ筈の。差いぬやうふもん身ふり。語ふふくと言ふふ。開い此方ふ泥濘いふ。定ふふ心ひ謀ふべ。と密談時と移ふるどふ。秋の日陰のやく傾ふきて。晡時とふりふけり。彼朝夷ど番守ふ番ふる。下奴ふい此頃ふやく酔醒て起あぐ。さも度助ぶ恥走ふ。ぞひの外ふ太く酔ふ。是ふとえまば申刻い過ぬ。刀称ふ程ふ〻飯ふふん。抔盛とふ収ふと。えいのぐまどまど酔の。篤と醒わば浪こと。院のうちふ散しふ。東西と斥倚ふどふるふ。外の方暴ふ噪ぐふ。飯ふざふとい多ふ。其処へ馳出ふ則美秀先ふえて。こまふひひ副ふ妻城四郎。阿武隈大夫も後方ふ在て。折ふふこふる玄関へ馳出ふ輩ふい。當所の知縣岩渕作理。手瀬堂六名と始めふ。這回の條ふ加つ合ふる。上下の官吏七八人。ふふ一容ふ並居ふ。その労と謝し且今日。朝夷大人が教諭ふふりて。ふりの浄倫一時ふ決し。庶民安堵の思とるまとて。吾名ふ放て

この上なき。慶びゆていうまでぶ。高より此館ふ待受へ心斗の東西と捧て。大人ぶ恵ぶと謝せん為より。去未ゝ此方へ来るくよと。先ふ五々彩城ぶ館のいと廣らゝる書院へ誘ひ。まづ上坐へ美秀ぶと。居て尊敬ぶ。その容さゝふ他意ぶいんゆるめゝこの頃の人心ふい油断なるまじと。朝夷いとき程ふ今釈と做て今日い終日。労ぶとるふ彼処へ往て。休息なさんと外と側つると。作理茫六五よりそ。まづゝ雲時と推駐め。果敢けまごども捧物と。今奉る所より。這ふ在下名ぶ寸志なるとと。注めらまてい強ふ固く辞するも尼鄙の人ゆきて善ものむと。思ひて本坐ふ復ると。弁ふ小性童と始めと。阿武隈なども奔走して。持出る珍膳美味所せきまで並べり。朝夷いとまとうて。這い殊ゝき池走る。在下酒い嗜めども。酒菜い常ふ三種の東西とのみ足まん。海濱も程近ゝうぬふかく鮮けき魚どもと。需めるふ人力と。在下ふ費ぶ所為るべ。却て心ふ快ゝゝと。苦笑ひもる當下ふ四郎時直い衣服なども著更てゝ出来り。大人よ然のゝる言めひそ。這い知縣名ぶ志と表ぶまでゆているる。辞ゝゝふ本意なるらん。去未ゝ献酌めと。已まづ酒杯と。把あげて朝夷ぶ前ふ居て勧むるなどふ美秀さのゝふ固辞ゝめて。杯とりけまべ。傍て儲の侍女名ぶ粧ひ装まて前後ふ立ち。酒菜と挾ゝ折敷ふ捧ゝて。一個ゝゝの前ふかゝゝて於てかの作理茫六い前ふ進ゝ。自ら酌とるて朝夷ふ及び。彩城阿武隈ふ進めり。かゝて程なく暮ふ及べ。例の銀燭と點ー列ねて。酔飲時と移すまふ為や戌剋ふ覚ー以須。傍の隔紙颯と開き。蕭然ともて出る人あり。這い誰なるゝんと一座の人ゝ見るふ是なん磐城の愛妾。彩ゝふい髪とふり乱。紅粉とぶふ粧ひわべ色青ざめて十分ふ憂と含ミー景勢ふ。寥ゝと衝立さり。人ゝふと祝て怪ーむ所ふ。阿武隈佶と祝て声と励ー。汝滝婦何

方へ往る。昨夕朝夷刀称と歓待て。その後い弗ふ居らず。館の隈こ求め飽俟渠定りふ容夫ありて。今宵賓客のこの紛まふ走ア〻ゐん然いあれ。

新城の刀称ふい汝とりひ。吾も平生こ鵠恩とりけゐるこも顧らず。浩不良の挙動ゐて。この後何の顔ありて。人ふ面い合せんとゐ。浮ふ長き秋の夜と。間睡こもゐるりしを。何方へ往て今まで居ゐる。まこ其上ふ賓客と。歓待席へ案内もゐるべ。枕ふ乱ま〻寐ゐまと髪と。把揚もせず。臆もせず。出ゐい烏滸の挙動ゐり。頓こ下ま疾ゐりむやと。朝夷新城と尻目ふ見て。一段高く詈言まべ。岩渕芋瀬と始めと。興醒自ふ瞻望てゐり。當下新城い徐こと。新城が居へ坐とゐめて。阿武隈大夫と元かへア〻。絆釈ゐら〻ゐわば。然宜ふも理ふいあ〻れど。こまふ容子のゐきこゐい妾陋〻き賤女の。即操後ぎ気いあ〻ゐこも。かゝまで深き恩とゐけ。何と不足ふ異夫と。重ねて身とや匿まべきと。えゐりいそで猶疑ゐいまん。さゐまと昨夜ゐりの一始終。明こ地ふいそでこの席ふ面伏ゐる人もゐゐべく。いそでとすれば已が身の。証明と立ゐふゐもゐけまべば。果ま〻ぞまゐし侍ま〻ん。その仔細ハ他ゐゐべ。朝夷大人い鎌倉ゐり。使のことゐれば。敬ひ冊き奉ア。努こ疎畧あゐべ〻ぞと。主の刀称のゐれゐも。令畏こ酒宴の席の。果て卧房へ入らま〻ゐり。侍女どもふゐわ任ま〻い。裾ゐき條ふもあ〻ん元と。思ふふゐりて子舎と出。彼処へ到ア日中の程召されゐ衣の前後も。心着んと奈アこゐふ。ゐや侍女ゐい其処と退き。朝夷大人い卧房ふあり。妾ゐ往〻と。僥倖ふ咤狂めてこの頃の。長途ふ足と太く病ア。腰と捻ア〻ゐ〻せんやと宣ふ〻ふ否む術ゐ。傍へ倚て脚ゐゐと。揉摩ア〻ゐ〻らする。その折忽地起上ア。腰捻ア〻ゐい當座の計畧。実い汝ふ国の伽とゐさせんとその為ゐるを。去来こゐまと横陳して。旅中の憂と晴させよと云ひも

朝夷七編巻四
計策を授けて
磐手再び
朝夷を
罵る
いとぢ
いも田
いとぢ
あく屋

うけぬ雑題ふ。嗟やと胸い噪げども。十四十五の處女の如く。その侭逃んもうゐ沼
ゐり。然いとて深く慙ぢゐるば。怒ることもなんとても恐まこ右左同荅も口隱り
う。その意ふ従ぐべきうゐわば。才と逡巡てその仰いく有難くい侍まども。
妾ハ既ふ城めふ恩と稟ける者ふて。その応詞ふい順ひぐて。努こ君を
嫌ふふあれどこのとのゝハ許と願ひまつるといくども許さん仁王の如き腕突
出して妾ゞ袂と緊と掠へ汝ゐくぞや吾いこま此陸奥でも鬼神と武勇を
称へらまて才ゐり。まこ鎌倉ふ誰おらふ和田義盛の三男ゆて権貴も惶ぬ
英雄と人も誉吾も誇る。されど思案の他とらふ。汝ゞ色香と愛想ひ既ふ
泄せ一言と仇ふるすとも為せんや。緞令磐城の側室ハのゝい実の渾家ふあり
とても想ひ詰る一念と翻ぐくぞぐき吾ゐくぞと時の権威と勇力と嘗ふ
挂る面憎さふ振きゝんゝふ思へども。羅綾の袂と切てかく。十八の屏風躍

ゐふゐゐ。猶躊躇てあるれどふ力ふ任ー引倚て厚ちめんとーゝふ故今い
辞するふ所ゐ。不虞の備へふ平生くとり。収むる所の懐劍ども早く抜んと
ちゐりーと見さん敢ゐく扱とゝと。女ふ似げるき又物三昧ことふい深き故縁
あゝん疾言ーと責られても固より巧めるとふもゐゝれば何とふべき術もゐく。
弱ア果る網の魚のごと交野の戸鶉夫や恋ーと思ふのゝ朝夷大人を
怒アふ乃塔を在ゐふ縄ゆて回ことと脚さん苦さん搦まつ。袋戸の戸とかー
閉て中へ突いと剰さん猿轡まで挂らまて。物いふてもゐゝ柴の葉末の露
と命さん消も入ゐん思ひゆて。夜い明られど許されを。検断ふとて出往ふ
迹ゆい下僕西三個夫ゝゐゐふ番とさん附らまてれば辛らじて遁ま出べんやう
もゐく。半死しる思ひの折ゝかの番人の下僕多ゐがや酒嚥と催しつ。後少い各
爛醉して前後もゐず伏ゐる。願ふてもゐき僥倖と足の先少て袋戸曳

あけ。まづ其塲とび道をゐがゝも。渾身痿痺て動くをば。故ふ皆く子舎ふ潛こ稍人心地着をふちりいそこの俊止をんしちく奈ゝて侍るゐ。貴ゐる人の善らぬうと。言をいくゝも烏滸ゐる所為ゆそ。後の崇ゝもいろならんと心痛めて侍をども。でオの証とをこをふ在の隨意こ言すゐ。其処ふ在をる朝夷大人も。悪くゐ把ゝのひそと真偽うち交て。満坐の中ふて泣つ笑ひつ言えらまて朝夷い持ゐる盃盥と投捨眼を睜ゝて舛ゝをの方とうち白眼て声と荒らげいくふも仔細の不審一けまとび後ふ搦て袋戸へうち篭ゐる実ふ然ゐり。その餘い汝らいふ所。僉表裡ゐる食言ゆそ言と巧こふ吾をゝそ。猶不幾の徒ふゐをんとする。その謀畧い誰教ゝそまづ時直め阿武隈大夫い別く逐一聴ゆそ。その餘の人もその事ふ與ゝしゐや否いちゝねど。一座の不肖ふ猶聴べゝゐれ一件いふとあり。昨夜人定の頃ふ及び。嫋婦未つそうまと挑む。その情頗る虚言ゐれば。假ふ惑へゐ面持ゝそ。猶その容と窺ふふ果ゝて匿せる匕首故こそあまと責問ふふいくゐゐ條ゐ主人時直阿武隈ゐ謀計と。吾ふ教へそ刺客とゐめと。綷明こ地ふ首伏せり。加之夫ゐる嫋婦い先ふ亡び。鉄肩矢藤五。重連ゐ妹ゆそ。吾と敵と寝ふゝ。具ふのひゝい偽ゐゝず。升いふの道理とゐゝそ。怨むまづき者と恨む。匹婦の一念許ゝもすべ。許がゝく鮮ゝづこれい。足下ゐ何の趣意とりそ。吾と婦女子のゆと假て害さんとい做ゝゐそ。心ひづこれ拳動ゐり。斯詰らい然ゝこい。決ゝて非そと陳ずべけまとび。嫋婦い慥の証人と。縛めをきゝを下僕ゐ。解ゝりゝて逃ゝしゝれど。猶懲ずまふ陷ちんと。おく未ゝん夏虫の。火影ふ今乗ふ未ふ拳動ふ髣髴ゐり。将来その次第と兼ゝ〳〵ん。問詰らまての時述れ。向ふ湯島

と密談して。思ひ儲けしとなれば。些も脱まぬ呵ると。冷々笑ひて童部へ
どもゞ。喧嘩どれ言とりて。詰めのふで笑止なる。吾こいくふ懦なりとも。
足下ふ太き怨ありて。害さんとを欲まるるる。爭甲斐なき女ふ託さん。
鬼神ふもあるを梵天王の再来なりとも一個の人なり。吾ことても壮夫なる。
必死と究めば何とら怖るん。然ゆるあるまじや朝夷大人漫ふ些の言をふと
設けて。威して人口と閉ぐんと。討らるとり酒呉の戯事。少流してよと宣ふ
こして。天晴直なる氣象いつんえて。特毋敷こそいなるとと。冷々笑へば朝夷い。
聽ふ堪ぞ勝てそ恵し。斷ぞ做しそを居りける

村田

朝夷巡島記全傳第七編巻之四 畢